

想起の言説形式と過去からの時間的距離

——8.15 社説と 8.15 投書の時系列的比較分析——

藤森 啓

本稿は、歴史叙述や記念行為といった、過去の出来事の社会的な想起を考察する一環として、過去（想起対象）からの時間的距離と想起のあり様との関連に迫ろうとするものである。そのために、想起にともなう言葉における、現在から見た過去との関係性——「想起の言説形式」と呼ぶ——に注目し、その使い方が時間的経過によってどのように変化するかあるいはしないのか、について検討をおこなう。本稿はデータの検討そのものと共に、随時なされる方法論上の議論に一方の主眼がある。

1 ねらい——時間的距離によって想起の言説形式を説明する

1-1 想起における時間的要素

1980 代の半ば以降、欧米において、また日本では 90 年代後半位から、社会的な記憶研究、つまり個人の脳内の活動や個人的な身体表出や言語表出といった個人のレベルには還元できないような「記憶」の研究が盛んに行われるようになってきている。それぞれが多様な研究目的を持つものではあるが、「記憶」という語を媒介として過去を現在において呼び出す集団的、社会的プロセスを議論するものとしては共通しており、社会学、歴史学、社会心理学、人類学等の交錯からなる 1 つの学問領域を形成している。この社会的記憶研究には、国家・エスニック集団・家族・世代などの集団的アイデンティティを確立するための過去の創造・選択とその利用のプロセスと描くもの、あるポピュラーな

人物の名声の構築とその現在の状況への政治的利用を明らかにしようとするもの、グループダイナミクスによる想起の創発性を見出そうとするもの、個々人に定位した場合の記憶の社会的枠組みのあり方やそのつくられ方を検討するものなど、いくつかのタイプがある。

いま例として挙げた社会的記憶研究の 4 つのタイプのうち、研究量で多数を占めるのは最初の 2 つのタイプである。その多くは表象をめぐる政治を描くような議論で、想起主体の意図、利益、よって立つイデオロギー、また主体に働く社会的な認知枠組み（あるいはパラダイム）に注目して、記憶、特に公的な記憶が、制作されたものであると暴露することを主要なモチーフとするものだった。他の 2 つのタイプもこのモチーフに関わるものが多い。

こうした記憶の政治学的な議論の趣旨と意義は了解した上で、本稿は、社会的記憶の維持と忘却に対する関心の下、少し焦点をずらしてみようと思う。個人の「記憶」の維持は生活上重

要な問題だが、より公的、社会的な場においても、同時多発テロの記憶、震災の記憶、後で論ずる戦争の記憶などについて、それをいかに維持するか、そのためにいかに伝達するか、ということがしばしば語られ、そのため記念式が催されたり歴史学やジャーナリズムが関わったりすることもある。

「記憶の維持」やその逆を表す「忘却」や「風化」といった語には、日常感覚として、時間的経過に伴う実践や現象、という意味合いが含まれるといえよう。本稿は、この時間的要素を記憶論へ有意義に取り込むことを試みる。

1-2 従来の社会的記憶研究における時間的要素

従来の社会的記憶研究では、時間的経過——後で「時間的距離」と言い換えられる——と想起のあり方との関係にはあまり焦点があてられてこなかった¹⁾。記憶の表象ごとによれば、例えば過去の出来事や過去の偉人に関する記念碑の解釈、同じく記念式のあり方、博物館における過去の出来事にちなんだ遺物の配置のされかたが、それぞれの文脈における社会的記憶の表象として、自覚的または結果的に扱われているものがある。また広く流通しているとみなせるような、歴史記述やマスメディアによる過去の出来事の解釈の仕方がその表象とされることもある。これらにおいてはしばしば、記憶のあり方が表象をめぐる記憶と記憶のコンテストや闘争として描かれてきた。忘却について述べられるときも、その多くはコンテストの敗者としてあるいは優勢な記憶に抑圧されたものとして描かれてきた。また少数ながら、過去の出来事に関して「次の出来事のうち知っているものはどれですか。具体的に説明もつけてください。」(Schuman & Corning [2000]) などの質問によ

って、統計処理上、共通の記憶とみなせるものを調べるような研究もある(藤森 [2003])。だがいずれにしても、時間的経過という要素は、必ずしも無関係でないとしても、少なくとも想起のあり方へのその直接的な関わりが論じられることはなかった。

これらのように記憶の表象を1つの節をした共時的な諸作用・現象として社会的記憶を捉えるのはよいとしても、通常、「記憶・想起」の語から得られるわれわれの感覚はこうしたいわば共時的なものだけではない。想起を「過去を現在において呼び出す行為」のことだとすると、それそのものを議論しようとするならば、現在のこの行為の規定要因などを考察することは別に、「呼び出す行為」における過去と現在とのつながり、あるいは過去と現在との関係性に照準した検討が必要となると思われる。しかし従来の社会的記憶研究は、それぞれの目的からして当然のことだが、そのほとんどが、特に経験研究に関しては、記憶が記憶であるゆえんであるこうした時間的な要素の検討にはおおむね頓着していないのである。

1-3 想起の構造と時間的要素の導入

想起という行為のあり方は、その様態(記念式がどこで誰の出席によって執り行われるか、ある過去に関する記事が新聞の何面に載せられるかなど)とそれに伴って発せられる言葉とにわけられるだろうが、本稿の検討は後者のあり方の方を対象とする。後述のいくつかの箇所です時、明示的・非明示的に示されるように、そちらのほうに記憶の議論が広がり充実する可能性を見るからである。

さて想起行為の様態にしてもそうだが、想起にともなって表明された言葉のあり方にしても、従来の研究から言えば、想起行為のあり方には、

想起主体の意図、想起主体が関わる利益、想起主体のイデオロギー的基盤、想起主体の認識枠組み、想起されるトピックなどが大きく作用するといえる。こうした規定因は、従来の記憶研究を受け継ぐために受け入れたいと思う。だが想起の行為のあり方や想起の言葉のあり方を規定するものはもちろんこれだけではないだろう。時間的経過（時間的距離）、文化、言説編成規則などといった要因も考えられる。ただしこのうち時間的経過以外の要素は、それ自体が漠然とした概念であるということもあり、また特定の時と場所において実際にどのようなものであると判断することもきわめて困難であり、事実上、想起を説明する変数としては採用することはできない。それに対して時間的経過については後述するように、操作化がある程度可能であり、またそれによって想起の言説をある程度説明できると考えられる。この時間的経過は、想起主体の意図やイデオロギーなどとまったく独立に想起の言説に作用するという描き方は困難であるし、有意義とも思われない。上に挙げた規定因は、時間的経過という要素と共に重層的に想起行為に関わるだろう。本稿はこの重層性を踏まえつつ、時間的要素を用いて、想起の言説のありようをみる、あるいは時間的要素を含む重層性がどのようにになっているのかをみるための手がかりを得ることが目的であるといってもよい。また後述するように時間的経過は物理的な側面も持っており、想起主体の意図やその他をある程度拘束する面もある、つまり想起主体にとっては、不可避的に生じる時間経過のプレッシャーにさらされることになる。これに対して想起主体がどのような対応をするのか、あるいはしないのか、想起主体の持つ意図や利益や認識枠組みやイデオロギーが、そうしたプレッシャーがかかることによってどのようになってい

くのか、について考察するための前提を提供することも可能かもしれない。こうした時間的要素の導入によって、従来の記憶研究を大幅に充実させることができると考えられるのである。ただし本稿においては、そうした研究上の展望の下、時間的要素に焦点を当てるために、戦略的にあえて他の規定因をなるべく用いない描き方をする。

1-4 想起の言説形式

時間の経過と想起のありかたとの関係については、欧米の社会的記憶研究の領域で高く評価されていると目される研究(e.g. Confino[2000])として Henry Rousso [1991] の議論がある。Rousso は第二次大戦のドイツによるフランス占領期に対独協力を行ったフランスのヴィシー政権についての戦後の社会的記憶を時系列的に辿っている。彼によると、1944 - 54 年はフランスが内戦とパージと特赦の後を直接的に処理しなければならず、ヴィシーについて盛んに語られた。ところが 1954 - 71 年にはヴィシーの話題は、1958 - 62 年の「時折の噴火」を除いてあまり論議されなくなった。フランス人は明らかに、「レジスタンシャリズム」という優勢な神話になったものの助けを借りて、内戦の記憶を抑圧していた。1971 - 74 年にはこの注意深く作られた神話が壊れ、1974 年から今日まではヴィシーについては盛んに語られるようになった。これは多数作られた映画の影響やそれとからむユダヤ人の被害の記憶が再覚醒されたことによる (Rousso [1991])。この Rousso の議論では、想起のあり方（頻度）が、当時話題になっていたトピックや優勢な記憶による抑圧や、ヴィシーに関係するあるいは連想させるインパクトの強い映画の流行などによって説明されている。説明基準がまちまちなのは

ともかく、時間的経過という変数そのものによる説明にはなっていない。つまり時間的経過とは直接関係のない要素によって説明されていることになるのである。

ところで、先に想起のあり方をその様態と言葉とに分けたが、その言葉のほうはさらに内容と形式とに分けることができるだろう。すると、Rousso は必ずしも言葉のあり様に照準を合わせていたわけではないが、言葉レベルではその内容面、つまり過去について言及する対象や解釈の変遷を描いていることになる。このように、内容に焦点を当てることと、時間的経過と想起との関係をつかむこととは相容れにくいのではないかと思われる。より一般的に、時間的要素を考察するためには、何に対して言及されているかということだけを時系列的にみても、つまり例えば戦争のどの部分を想起しているか、それをどう解釈しているか、どのような記念式がなされているか、どのような教科書記述がなされているか、といったいわば想起の内容の変化だけをみていっても、考察が進みにくいように思われる。内容をみただけでは、従来の記憶研究の枠組みが作用しつつ、想起主体の意図がどうか、そこにどのような権力作用が働いているか、認識のパラダイムはどうか、イデオロギーはどうか、そしてそれらがどのように変化してきたか、という問いのほうに引っ張られていってしまうと考えられるからだ。本稿のデータを先取りすれば、例えば朝日新聞が「経済成長」や「従軍慰安婦問題」という内容の文を 8.15 にちなむ社説に盛り込んだり、沖縄タイムスが「米軍基地」について同様に扱ったりするのは、その当時においてはそういうトピックがしばしばとりあげられていた（特に当のその新聞で）からだとか、そこに各新聞がよって立つイデオロギーが働いているとか、各紙が想

定する読者（購買者）向けにあるいはそれを背負って立つ立場のためにそれら読者の意識とマッチするような解釈になるとか、そうした中に権力作用が働くとかいった描き方がオーソドックスなやり方となるだろう。たとえ時系列的に描いても Rousso と同様、説明の仕方が同じようなものになりやすい（e.g. 石田 [2000]）。またこのことは、従来の記憶論が内容を対象にし、かつ時間の経過を扱ってこなかったことと符合する。

そこで本稿では、以下のような、想起行為に伴う言葉の形式のほうに着目する。時間的要素と想起との関連に迫るために、想起する際の手続きにおいて、想起する現在から見た想起する対象としての過去との関係性がどのように表れているかをみしてみる。つまりある過去に関して言葉を発するという想起行為において、①過去自体のことを述べているのか、②過去から現在にかけてのプロセスを述べているのか、③他者または自己が想起するのをメタレベルから論じているのか、④その過去を想定しつつ直接には現在のことを述べているのか、といったことを区別しようということである。これらを以下、「想起の言説形式」とよぶことにする。

本稿は先に述べた記憶の維持や忘却、風化といったものを直接扱うわけではないが、それらを念頭に置いた上で、想起の言説形式と時間的経過の関連をみていきたい。個人的な、または仲間同士の間の「集合的記憶」であれば、起きたばかりの出来事については出来事じたいが、つまり何が起きたのか、それは何だったのかということが語られるかもしれないが、時がたてば同じ出来事を思い出す際に、語っている自分たち自身について語るようになるかもしれない。また徐々に現在の自分達の状況が過去から様変わりしたことを語るようになるかもしれない。

またより公的な場においては、ある過去についての記念式が早い時期からあっても、それについて、つまりメタ的に語るようになるのはかなり後になってからのことかもしれない、実際そういうこともあるだろう。あるいは「トラウマティックな」過去のケースに関しては最初は過去そのものは語られにくいが後になって語られ出すこともありうる。これらの可能性は推測に過ぎないが、このように時間的経緯、より厳密に言うと、想起時の、想起の対象となる過去からの時間的距離—以下ではこうよぶ—が大きくなるにつれて、想起する際の言説形式に変化が起るのではないかと考えるのである²。

1-5 扱う資料等

こうした検討を行うために、本稿では朝日新聞の8月15日の「終戦日」にちなんだ社説、沖縄タイムスの同様の社説、朝日新聞の8月15日にちなんだ読者の投書の、それぞれ2000年までのある限りの毎年分をデータとする。それぞれを「8.15社説」、「8.15投書」とよぶことにする。朝日新聞を選んだのは全国紙の典型としてたまたまそうしたに過ぎず、それ以上の意味はない。同社の投書と沖縄タイムスの社説を選んだ理由は朝日新聞の社説との比較のためである。これらのデータを具体的にどのように用いていくかについては後に示される。

そもそも記憶や想起のあり方とは、想起する内容—記述が指し示す対象や解釈の仕方—や想起する主体が誰か、といった要素だけでは語りつくすことができない。ここ1、2年の日本の社会学における記憶研究では、欧米とは異なり、「まずは記憶とは何かを知ろう」という姿勢が趨勢の1つになっている³。本稿は、想起・記憶研究の領域を拡大し、記憶の政治学の議論をも充実させるだろうこの「解剖」に向け

て、あえて困難なアプローチをとることになる。本稿がとる手法は「手本」となるものがないため、試行錯誤的でやや荒削りなものになるだろうが、少なくとも想起の言説形式がランダムにとられているのではないことは確かめられるだろう。

2 時間的距離という概念とその操作化

本稿は、想起時点の、戦争時や終戦時という過去からの時間的距離を扱うが、これ自体はどのようなものとして捉えるべきか。「時間」なる捉えどころのないものの一般的定義をここでするつもりはない。本稿にとって有意義な「時間的距離」概念は何かということである。後述するようにこの概念を変数として操作化することは簡単なことではないが、操作化自体のためはもちろんのこと、後のデータ処理のため、また本稿以降の展望もあり、これを定義しておく。

もちろん時間なるものを実在物として扱い、天体の運行や時計の針の動きに基礎を置く暦の上での時間や、暦上の特定の1点と1945年8月15日との引き算による時間を、それ以上説明し得ない説明変数として置くということは、少なくとも理念上はしない。先に、時間的距離という要素を引き出す手がかりとして出した日常感覚的な「忘却」や「風化」といった言葉に立ち返って考えると、本稿にとって有意義と思われる時間的距離の概念は、想起主体の持つ時間距離感覚—社会的な行為としての想起を考えているいじょう、他者との共有感覚をとまなうそれであって、個人内の閉じた感覚ではない—といえよう。これは、想起主体が戦争や終戦といった過去を想起する時点で、そうした過去から想起の現在までどれくらいの距離がある⁴とみなすまたは感じるかということである。

この意味での時間的距離は暦の上での時間とは異なるものだが、それと全く無関係とは思われない。クロノジカルな時間的進行を回顧する、あるいは暦上の時間を確認することによって、それは拘束されるだろう。ここでこの「感覚」を考えると、暦上の時点（時刻、時期）によって表現すれば、ある時点 a の経過の次に時点 b が経過し、その次に c が経過し、その次に d が経過する、という場合に、a と c の時間的距離は a と b のそれよりも大きい、というような、序数的な尺度における「距離」が重要である。ただし暦における時点というのは、時計の針がある特定の場所に来ること、あるいはカレンダーにおいてある特定の日付がその日に相当することが示されるなどのことを意味するが、厳密にはそうしたものだけでは今述べている「時間的距離」概念にとって（そしておそらく社会学一般にとって）不十分である。時点に実質的な意味を持たせるためには、事態 a の生起の次に事態 b が生起し、その次に事態 c が生起し、その次に事態 d が生起し・・・と、事態の推移として「時点」つまり時間軸上のポイントを捉えることが有効であるように思える。またこれはあくまでこれは序数的な尺度であって、単なる事態の推移ではなく、特にランダムな推移ではなく、一定方向的なものであることは確認しておかねばならない。そうした意味での時間的距離とは、世代の交代、戦争・終戦やそれに関連する言及の積み重ね、個々人の単純な生理的な忘却、戦争・終戦以外の諸々の出来事（話題として取り上げられうる出来事の量的増加）などといったものにおけるそれぞれの方向性の進行の程度の総体のことである。結局、こうした意味での時間的距離は、具体的な暦上の時期や暦上の2点間の具体的な距離と、経過や増大という点に限っては軌を一にする。ただし

もちろん、それらの概念上の区別は踏まえる必要がある。

さてこうした時間的距離を操作化するのには困難だが、1つには、社説や投書の中にある言葉の中にそれを示しそうなものはある。いわば単純な時間感覚の言葉や世代、「風化」、「忘却」といったものについての言葉である。今回のデータにおいては、社説においては例えば「歳月は早くもめぐり、今日・・・終戦満十年目の記念日を迎えた」、「終戦日は遠い昔のことのようでもあり、当時のことを思い浮かべると、つい昨日の出来事のようにも感じられる」、「戦争を知る世代と知らない世代に価値観の断層が生じている」、「戦争体験の風化がしばしば取りざたされている」といったフレーズは、個々の意味合いはケース・バイ・ケースとしても、いずれも時間的距離を示す言葉として捉えることができよう。

ただし表明される時間感覚は「沖縄はいまだに基地の中にある・・・27年間は長いようでわずか27年前という感じもする」などのように、しばしば、記述されている対象としてのトピック—これを「トピック変数」とよぶ—が絡んでいる。この意味で、時間的距離を示す言葉とトピックとを完全に相互に独立したもののみならずことはできないが、上の最初の2例や「27年間は長い」の部分、また後述3-5-3で挙げる多くの例で明らかのように、それらが常に強く連動するとも思えない。議論の煩雑さを抑えるために両者の関係はいったん棚上げし、時間的距離を表す言葉を、トピック変数から独立した変数として扱うことにする。

だがデータの量的制約もあり、実際にこれらの言葉の意味を解釈し、それと想起の言説形式とを照らし合わせることは、結果としてごく部分的な側面においてしかなされなかった。そこ

で他のやり方で推定される時間的距離感覚によって議論を進めることが必要となる。そのためやむをえず、暦上の時間を推定のために用いることになる。つまり例えば1985年8月15日は「終戦から40年経っている」わけで、その事実から社説執筆者や執筆の前提となる論説委員会の会議において、それに相当するような時間感覚がある程度作られると思われるのである。ただし上述したように、時間的距離としては、10年たったことより40年たったことのほうが長い年月が過ぎた、と認識されるということに過ぎず、1985年8月15日に特段の意味があるわけではない。また世代の交代、戦争・終戦やそれに関連する言及の積み重ね、個々人の単純な生理的な忘却、戦争・終戦以外の諸々の出来事の生起などといったものにおけるそれぞれの方向性の進行もまた、作業上の制約により少なくとも今回は具体的な操作化ができないものの、これもまた暦上の時間で代用できる。つまり暦上の時間が経過していれば上のことがらもそれぞれ進行するとみなす。ただし、あくまでも時間距離の増大が問題であって、ある時期はある時期よりも時間的距離が増大した、と言いついであれば可能だということである。これらは、ある暦上の1点は他の1点よりも時間的距離が増大した（表面上は「時間が経過した」）、というとらえかたになる。これが時間的距離の操作化の第2の方法である。

繰り返しになるが、この第2のやり方で操作化された時間的距離は、あくまでも序数としての意味があるだけである。暦上の1945.8.15と他の1点との間の差の具体的な数字は、それじたいを時間的距離とはみなしがたいが、複数のそれから「時間距離が増大した」ことを見取ることはできる。

時間的距離という概念は、こうして、暦上の

時間経過によって推定される序数としての時間における相対的な距離、という形で、変数へと操作化される。後の検討でいえば、例えば朝日新聞と沖縄タイムスの社説を比較する際、時間的距離変数は主に、具体的な暦上の時期よりも、終戦からの経過にしたがって想起の言説形式がどのように変化するか、をみることになる。そして可能なかぎり理解の補助として、操作化の1つ目として述べた、時間感覚を表す言葉を用いることになる。

3 想起の言説形式を時間的距離で説明することを主目的とする諸検討

3-1 3つの具体的課題

以下で行おうとすることは3つある。まず第1に、想起の言説形式にはどのようなものがあるかを確認し、具体的な記述例を引きながら、その形式間の境界を確認する。これは以下の、特に第3の課題の前提となる。第2に、朝日新聞の8.15社説、沖縄タイムスの8.15社説、朝日新聞の8.15投書に関して、その成立時期はじめ、ごく基礎的な事項について素描を行う。これも第3の課題の前提あるいは少なくとも地平となる。そして第3に、想起の言説形式と時間的距離との関係に迫るために、各社説と投書で採用されている想起の言説形式の時系列的変化を比較する。これが冒頭で記したように本稿の主目的であり、かつもっとも困難を要する課題でもある。

3-2 データ

使用するデータについて多少詳しく記しておく。すでに「8.15社説」とよんでいるものは、1945年8月15日に終結したとされる戦争に関して、各年においていわばその終戦を記念す

るような新聞の社説のことである。8月15日かその前後に出されるもので、「終戦記念日に当たって」などの表題がつけられたり、冒頭に「あの戦争が終結してから〇〇年たった」の言葉が置かれたりしている、いずれにしても朝日新聞と沖縄タイムスにおける、「終戦の日」にちなんだ社説といえるものを扱うのである。社説については、あくまで8.15にちなむものであることが執筆者によって意識されていると思われるものに限る。8月15日の社説で、例えば「原水禁大会に思う—「平和への力」育てよう」（沖縄タイムス1969.8.15の社説タイトル）のようなものは、戦争が絡むとしても記念日としての社説であることを示す記述がなければ——この社説には実際ない——、データのコントロール上、扱わない。また沖縄では1962年から、沖縄戦終結にちなんで6月22日が「慰霊の日」として法定休日とされている（現在では6月23日）。この日、琉球政府主席あるいは沖縄県知事の出席を伴う「沖縄戦没者慰霊祭」など、全沖縄各地で戦没者の慰霊祭が行われるようになり今に至っている。沖縄タイムスはこの日向けの社説も毎年のように出しているが今回は扱わない。

一方「8.15投書」としては、これもデータのコントロール上、朝日新聞の投書欄である「声」に掲載されたものを扱う。こちらのほうは大題目として「終戦の日に当たって」などと付される場合とそうでない場合とがあるが、いずれにしても、8月15日とその前後に見られる、戦争に関する記述を盛り込んだ投書を、8.15にちなんでいるとみなして用いることにする。

本稿は今後の研究のためにいわばあたりをつける予備的研究の位置に当たるので、データの種類・量としては以上のものに抑えておく。こ

れらにおける想起の言説形式その他を検討していくことになる。

3-3 想起の言説形式—分類基準

先に述べた想起の言説形式について、今回のデータに即しつつ確認し、さらにそれぞれの境界を具体例によって示しておく。本稿で設定するこの形式は、①戦争や終戦自体のことを述べる形式——以下「戦争」、「終戦」と記す——、②戦争や終戦から想起する（社説や投書の記述をする）現在にかけてのプロセスを述べる形式——以下「戦後」と記す——、③他者または自己が社会的あるいは個人的に想起するのをメタレベルから論ずる形式——以下「想起論」と記す——、④戦争・終戦という過去を想定しつつ直接は現在のことに焦点を当てて述べる形式——以下「現在」と記す——である。これは1945年8月15日を時間軸の原点に置き、社説や投書を書いている、つまり想起している現在から見て、戦争や終戦と現在とがどのような関係性において捉えられているか、によって分けたカテゴリーである。

より詳細に各カテゴリーを設定しておく。「戦争」は、1945年8月15日によって終息されたとされる戦争とそのときの諸状況それ自体や、それにつながる戦前の状況についての事実の叙述や解釈等を指す。「終戦」は終戦時における諸状況についての事実の叙述や解釈等を指す。ただし結果として今回は両者を分けることに意義を見出すことができず、共に「原点」そのものとして同一カテゴリーにまとめることにする。「戦後」は、例えば「経済成長を遂げた」のような終戦から現在にかけてのプロセスに焦点をあてて事実や解釈を述べているものをさす。これには例えば「終戦後4ヵ年たって、荒廃した沖縄には戦前の姿を見出すことはできない」

といった、終戦から現在まで変化がないことを記しているものも含むことにする。「現在」は「防衛費の GNP 1% 枠をはずそうという動きがある」などという、焦点が現在にあるものを指す。これは 8.15 社説だから戦争・終戦という過去を想定しているといえるのであって、そうでない場でこのフレーズが出てきても、それを想定していることになるとは限らない。

「想起論」は他より詳しい説明を要するだろう。これは集団・社会的、個人的なものを含む、過去を呼び出す行為——想起という行為——について事実を記したり解釈を行ったりするものを指す。想起行為にはさまざまな種類があるが、それについての言及をひとまず一括して「想起論」として扱う。これには、「慰霊祭と平和集会在全国でいっせいに催される。全国民を挙げて敬虔な祈りを捧げ、平和日本の建設に決意を固める尊い記念日である。」といった追悼式という想起行為についての言及、「沖縄戦での、日本軍人による住民虐殺の記述が削除された。自民党や文部省の検定の真の狙いは明らかだ。」のような歴史教科書の記述という想起行為についての言及、「8月15日となると犠牲となった親兄弟縁者知人の追憶とともに、悲惨極まりなかった沖縄戦によるさまざまな受難が頭に浮かんでくる。」や「(一般的に) 30年前の8月15日の感慨を気持ちの上で完全によみがえらせることは困難かもしれない。」といった、筆者自身や他者の体験等の想起に関する言及、「戦争の惨禍を伝えていくべきだ。」のような、経験を伝えるべきとする言及、「十年一昔とあって、「基地沖縄」という状況もあってか、戦争への恐怖や憎悪の感情が次第に薄れ、反対に安易な逆行情勢に身をゆだねつつあるのではないか。」といった、戦争が「忘却」されることについての言及、のいずれも含まれる。ただし「終戦記

念日の意義は、戦争を二度と繰り返すまいという教訓を後世に伝えるところにある、と同時に、戦時そのままな(ママ)被支配から抜け出ることを願う日でもある」のような 8.15 の意義を述べる記述は「想起論」とも言えるが、ほぼすべてが冒頭で記述のきっかけとして決まり文句のように述べられており、これは「8.15 記念社説」化を見る目安とはするが、このカテゴリーには、紙幅を多く取っているもの(1パラグラフ以上用いているもの)以外は含めないことにする。また他の形式と同様、「想起論」に、「閣僚の多くが靖国神社に参拝した(する)」のような単なる事実的な記述だけの場合も、それに加えて「近隣諸国の反発が予想される」、「戦前回帰である」のような解釈等がつけられた場合も、共に含むことにする。「現在」は、「発達した核兵器があらゆる生存を脅かしている。」や「GNP 1% 超えてもいいのでは、という声もあるが危険だ。」といったものであった。「想起論」そのものは現在についての記述ではあるが、「現在」には「想起論」にあたるものを含めないことにする。

ただし実際の記述がこれらのカテゴリーのどれかに明確に仕分けできるわけではない。こうしたグレーゾーンについても若干述べておく。まずパラグラフ単位などで必ずしも1つの形式がとられているわけではない。例えば「戦争の犠牲者は多大だった」という「戦争」形式、「だからそれを語り継ぐ必要がある」という「想起論」形式が切れ目なく連続しているというのはごく普通のパターンである。また例えば日本の閣僚が日中戦争を「侵略戦争ではなかった」と発言したことを記す途中にその認識の不合理性を示すために日中戦争の事実を挿入するというような、包含関係になっているケースもしばしばみられるが、この場合もそれぞれ「

想起論」、「戦争」として扱う。これらの形式のとり方は、社説や投書における話の流れと関連するのは当然としても、それとはある程度独立しているものとして捉えるのである。

また、ある記述自体がどの形式に相当するかがあまり明瞭でない場合もある。例えば1994年時点で「ここ数年の憲法改正の動き」を論じている場合は、1945.8.15からの連続性を欠く記述とみられるため、「現在」の形式とみなす。もちろんこの憲法改正の動きが実態として終戦直後からあったかどうかではなく、文脈として「ここ数年の動き」であるとみなせるためにそのような仕分けをするということである。逆に、論者が1945.8.15との連続性を想定していると思われる場合は「戦後」の言葉とする。例えば、日米安保条約締結は、6年の間隔を考慮する限りは終戦と連続したものとは捉えがたいが、「悲惨な戦争にかんがみ日本は憲法で不戦の誓いをした。にもかかわらず軍事同盟が成立し、再び戦争に巻き込まれかねない危険性をはらんできた」のような文脈においては、終戦と安全保障条約とは連続したものとして捉えられているといえ、このケースにおける安保条約締結の事実や関連記述は「戦後」に分類するのが妥当だろう。このように境界例に関しては文脈から判断しなければならないことがある。またあくまでもこうしたカテゴリー分けは、どの形式に焦点が当たっている記述であるかによってなされる。「現在」に分類されるものは、平和への願いを語った後で世界の地域紛争多発という現状に言及したり、戦争の結果であることを暗示しつつ沖縄の普天間基地の問題を取り上げたりするケースなど、8.15社説である以上、何らかの形で戦争とは結びついている。だがこれは、記述の焦点が現在に当たっている、つまり「現在」という主題に対して地平としての「戦争」

が連結しているという形なのである。

3-4 素描

ここで朝日新聞の8.15社説、沖縄タイムスの8.15社説、朝日新聞の8.15投書について、主に想起の言説形式以外のことについてそれぞれ素描しておく。

朝日新聞は1945年8月15日から連日のように終戦や戦争そのものへ言及する社説を掲載しているが、8月15日かその前後の社説としては、1946年8月15日、「ポツダム宣言受諾一周年」をタイトルに終戦以後の日本の状況を振り返っている。1948、1951、1951、1958の各年を除くと、実質的な意味で終戦や戦争を回顧する、またはそれらを念頭におくような記念的社説が今日まで毎年出されている。

この社説の内容を見ると、当然ながらその当時話題になっていたと思われることが影響しているようである。民主化、冷戦、高度成長、世代の断絶、石油危機、軍事力増強、教科書問題、靖国神社参拝、アジアへの侵略などが扱われている。こうして実際取り上げられるトピック——トピック変数——が、想起の言説形式を規定することが考えられる。このことは沖縄タイムスの社説も同様だが、この変数をどのくらい排除できるかまたはできないかが、次項の最も重要なポイントの1つとなる。

沖縄タイムスは米軍政下の1948年7月1日に創刊された。「創刊のことば」の冒頭で「終戦後四ヵ年今なお荒廃した沖縄には戦前の姿を見出すことはできない」としているのに象徴されるように、創刊後数年（1952年ぐらいまでが目立つ）は戦争自体への言及やそのエピソード、戦争による荒廃した状況、といった形で戦争関連の記述がしばしばなされている。その頃のものには「悲劇をもたらした日本帝国主義」や

「博愛の精神に満ちた米国軍人」のような類が多い。

沖縄タイムスが8月15日を「終戦の日」として扱い、それ向けの社説を初めて載せたのは、1951年8月15日の「終戦の日を迎えて」においてとみていいだろう。次が1955年8月15日になるが、それ以降ほぼ毎年の8月15日かその前後に「終戦の日」にちなんだ社説が出されている。

沖縄は1945年4月から6月までの沖縄戦を経て終戦後も引き続き米軍の管理下となる。時代は下って1969年11月に佐藤首相が訪米し日米共同声明で3年後の沖縄返還がうたわれた。1972年5月に返還が実現し沖縄県が発足した。また1995年9月には米兵の少女暴行事件が明るみに出た。これらは直接社説の内容に反映している。

沖縄タイムスの8.15社説は、日本のことへの言及と沖縄独自のことへの言及とが混合した構成をとっている。「沖縄」や「県民」などの記載がないために、それがどちらを想定した記述なのか読み取りにくい場合もあるが、わかる限りでそれぞれの言及量の程度をみると、1951年以来、相対的に沖縄への言及が方が多かったが、返還の翌々年である1974年から沖縄への言及が少なくなっている。それ以降、全く沖縄について直接は述べられていない社説も幾つかある。ここに「沖縄の社説」から「日本の社説」にシフトした様子が伺える。これを敷衍すると、例えば朝日新聞の1970年代までの「戦後」でしばしば言及されている、「高度成長」、「平和」、「民主主義」といったキーワードが、沖縄タイムスでは1973年以前にほとんど用いられなかったが、1974年以降の1970年代に頻繁に用いられている。

朝日新聞の一般読者による投書欄「声」にお

いては、終戦直後のほか、1946年8月15日前後に若干の戦争・終戦関連のものが載っているが、後者には特に8.15を意識した記述はない。8月14～16日のものに限ってみると、この日を意識した記述のある投書は、1949年8月15日分が最初のようなのだが、その後1961年まではごくわずかのものしか掲載されていない。1962年からそうした投書は急増し、この年以降、その日の投書のうち8.15投書といえるものが15日を中心にしばしば過半数を占めるようになった。この区切れ目の時期というのは、1963年から政府主催で首相や天皇も参加する「全国戦没者追悼式」が催されるようになるなど、日本全国で追悼式が行われるようになっていた時期でもある。8.15投書掲載数の増加と関連があるかもしれない。また1972年8月15日の「終戦記念日に思う」以降、8月15日前後の「声」には、時折この日にちなんだ大タイトルがつけられるようになった。

3-5 想起の言説形式と時間的距離との関係 ——時間的距離変数の焦点化

3-5-1 考察のポイント

では本稿の主要な課題である、想起の言説形式と時間的距離との関係について迫ってみたい。ただしデータの制約上、具体的な関連の仕方を示すというよりは、両者が確かに関連をもつとみなせるかどうかについて検討することにとどめ、その他、今後の研究につながると思われるファインディングスを提示して若干の考察を行うことにする。

本稿は、「ある想起の言説形式の採用」変数——[d]とよぶ——には「時間距離」変数——[tm]とよぶ——が関与すると仮定しそれを検証しようとするのだが、従来の研究や常識からすると、想起者の意図や言及されている

トピックなどの有力な変数が要因として関わっている可能性がある⁴。ここで時間距離変数以外の要因を分析上ある程度排除して、それと言説形式との関係をあぶりだそうとするならば、これら「想起者の意図」変数——[i]とよぶ——や「トピック変数」——[tp]とよぶ——などをコントロールする必要がある。[i]は実質の把握が困難だが、本稿においてはその中身はほとんど問わないままにしておく。というのは、後の検討を先取りすると、[i]を第3の変数とする[d]と[tm]との擬似相関関係の可能性を、少しでも排除できるかどうかはわからないため、つまり想起者の意図との関連なしに時間的距離によって想起の言説形式を少しでも有意義に説明できるかどうかは本稿のデータからは不明なため、[i]がらみの議論がそれ以上先に進みにくいからだ⁵。想起の言説形式に関わりうる他の変数についても、議論の煩雑さを防ぐため、またそもそもそれらをえり分けるためのデータがないため、今回は考慮しない。ましてや想起の言説形式への効果における、意図とトピックなどと時間的距離との交互作用については全く考察の対象外となる。結局以下では、[i]との関連については若干試みるが、主に[tp]との関連において、[d]と[tm]との相関をみていくことになる。

検討を進める際に、より具体的には主に以下の4つのポイントについてみていきたい(必ずしも記述の順番にはなっていない)。まず第1に、4つの言説形式それぞれについて、時間的距離——第4のポイント以外は主に暦を利用したそれを想定——の増大に伴ってどうなるのか。ここで言説形式と時間的距離との間に何らかの関連が見られた場合に、上で述べたように[tp]や[i]を第3の変数とするその擬似相関の可能性を疑う必要がある。そこでまず[tp]の

コントロールのためには朝日新聞と沖縄タイムスの社説、また朝日新聞の社説と同新聞の投書とをそれぞれ比較する。朝日新聞の社説と沖縄タイムスの社説とでは、また朝日新聞の社説と同投書とでは、とりあげられるトピック——[tp]の値——が異なることが多いだろう。またそれぞれの社の「8.15社説」への意図も異なるかもしれないが、予備的な調査では共に「戦争の忘却を防ぐためにどうすればよいか」というモチーフが基本的にある点で一致しそうなので、ある程度比較の条件がそろふことになる。そうした上で時間的距離の効果が見出せるかどうかをみるのである。そしてもし、例えば[tp]の値が異なっても、つまり朝日新聞社説が扱うトピックと沖縄タイムス社説のそれという違いがあっても、また朝日新聞社説が扱うトピックと同投書が扱うそれという違いがあっても「時間的距離」変数と「想起の言説形式」変数が同様の関係性を持つならば、[tm]と[d]とが[tp]を第3の変数とする擬似相関性のある程度排除する形で、つまりある程度それらとの関わり抜きで一定の関係を持つまたはそう説明できる可能性が示されることになる。

一方の[i]のコントロールのためには朝日新聞の社説と同新聞の投書とを比較する。この比較でも、異なる[i]の値における[tm]と[d]の一定の関係性がみられるかどうかをみてみる。ただしこの場合は「社説と投書の違い」という異なる変数がどのように関与するかが不明で、だいいち[tp]も異なってくるので、社説どうしの比較よりも明確なことは述べにくくなるだろう。ともかくデータの制約から厳密な変数コントロールはできないが、関係性の可能性を示すことを試みてみる。

4つのポイントの第2は、第1のポイントと関連するが、トピック[tp]と想起の言説形式

[d] との相関つまり、あるトピックについて述べるときは特定の想起言説形式をとりやすいか、である。その傾向の有無はそのまま [tp] の [d] への作用の強さを意味するだろう。だとするとそのことと時間的距離との関係はどうなるのか。第3に、時期的に想起の言説形式 [d] が一致する場合があるか。第2節で述べたように、時期と時間的距離とは直接には結びつかない。[d] が一致する時期があるとすると、[tp] が同じならばそれは [tp] の効果かもしれないが、その時期独特の何かが作用している可能性を排除できない。[tp] が異なればなおさらである。とするとこれをどのように考えることができるか。第4は、[tm] を構成するものの内、暦を利用する方ではなく、時間的距離を表現する言葉の使用と想起の言説形式との関係はどうか、である。これら4つのポイントがやや交錯した形で以下、2つの社説の比較(3-5-2)、時間的距離の言葉の分析(3-5-3)、社説と投書との比較(3-5-4)の順で分析とその結果を示す。ただし最後のものはほとんどアウトプットを出せなかった。

3-5-2 朝日新聞と沖縄タイムスそれぞれの社説における想起の言説形式

まず8.15社説における想起の言説形式について、時間的距離の増大に伴ってどのような採用傾向を持つか、朝日新聞と沖縄タイムスとを比較する。表1は朝日新聞、沖縄タイムスが出している各年の8.15社説にみられる、想起の言説形式の年別の採用状況である。もちろん、言葉の検討において言及されている内容を全く無視することはできないし、トピック変数などの言説形式への効果の程度を確認する意味で、内容を示しておくことは重要である。各形式をとる記述の年毎の有無だけでなく、記述の大雑

把な内容を示した文字を書き込んだ(ただし「戦争/終戦」における個人の体験は内容ではなく単に体験として記した)。たとえば「46-戦後-朝日-民」となっているのは、1946年の朝日新聞の8.15社説において、民主化についての言及が「戦後」形式でなされていたということである(詳細は「凡例」を参照)⁶。

既に述べたように、沖縄タイムスの社説には沖縄について特に言及している部分とそれを超える範囲について言及している部分とがある。このうち前者は、沖縄の社会に生きる社説論者としての、また沖縄の読者を特に想定した言及であり、いわば「沖縄の新聞」の側面といえるのに対して、後者は、より広い範囲の社会を生きる社説論者としての、またそうした社会を生きる沖縄の読者を想定した言及であり、いわば「社会の新聞」あるいは「日本の新聞」の側面といえる。そのことが言説内容に影響することは当然あるだろうが、言説形式にとっても重要かもしれない。そこで表では、「沖縄の新聞」と「日本の新聞」をそれぞれ「沖沖」、「沖日」と表示し、別々に形式の採用のしかたを示した⁷。また1マスあたりの内容が多岐にわたっているような記述に関しては、紙幅の都合上、分析に支障のない限り若干の割愛をした。

この表から、必ずしも明確ではないが、以下のことが読み取れるだろう。

- ①「戦争/終戦」の、時間的距離増大に伴う傾向について、朝日新聞と沖縄タイムスはともに増加傾向ということである程度一致する。
- ②同様に「戦後」のそれは、減少傾向である程度一致する。
- ③「想起論」はそれ自体では両社説の傾向が一致しているとはいいがたいが、それを、戦争の感じ方など個々人の想起を一般化した記述

表1 朝日新聞、沖縄タイムスの8.15社説における、各年の想起言説形式

	戦争/終戦			戦後			想起			現在		
	朝日	沖沖	沖日	朝日	沖沖	沖日	朝日	沖沖	沖日	朝日	沖沖	沖日
46		—	—	民	—	—		—	—		—	—
47		—	—	秩立	—	—		—	—		—	—
48	—	—	—	—	—	—		—	—	—	—	—
49		—	—	—	—	—		—	—	際	—	—
50		—	—	民	—	—		—	—	際	—	—
51	—	沖/		—	立秩			他	他	—		
52	—	沖/	因惨/	—				記		—		平
53		—	—	秩立	—	—		—	—		—	—
54		—	—	秩立	—	—	省	—	—		—	—
55		沖/	因惨/	民自	民援		感	感			政	
56				立道	基他		省	感省				
57				経自	基他			感日				
58	—			—						—	世	平
59				民	立他			日認				
60		—	—	経平	—	—		—	—		—	—
61				自民	立道		他	感			世	
62		—	—	経	—	—		—	—	世	—	—
63		—	—	他	—	—	記	—	—		—	—
64									世	世	基	
65	惨/惨	—	—	経民	—	—		—	—		—	—
66		沖/		自道	基治			記	記			
67	因/	沖/		他	治	経平	感		世伝	世	基	
68		沖/	惨/	経	基治	民	世		世	世他		
69	/感	—	—	他	—	—	世	—	—		—	—
70				経	他	他	感			世他		
71		—	—	—	—	—	外	—	—	平際	—	—
72		沖/感				立他	外			際他	基	世
73		他/感	/感	経	他	経軍		世				
74			惨/感			軍経			記	他		他
75		沖/感	/体感	経平		平経		感		世他	基他	平
76			/感他						認責	政経		
77		沖/	惨/	民				伝	世認		基	平
78		沖/		平経		平経		記責	感		基	平
79			惨/感			平経			世	世	平	平
80			/感		基他		記		記世	平	他	平
81	因/他								記	平		
82			惨加/	経他		軍	日	教	靖			平
83		沖/		平			日	記責	靖教	世平		
84	体加/他	沖体/感		平		平民	伝記日	伝	責記靖	平		平
85	加/	沖/感		経			認靖省伝	世日	記靖			平
86	体/体	沖/感	/体	平民経			靖教外世		記認教	平		平
87	/体	沖/体	惨加/	民		他	世日		記靖	際		平
88	他/	沖/					認教世他	日	世認伝	平		平
89		沖/		民				記責	記責	他		平
90	体/	/感	加他/		基		伝加世記	日世	記靖認外		基	平
91			加	道平		他			認外		基	平
92	/体	/他	慰他	他	他		外教慰伝	靖他	伝記世靖			
93	体/体	—	—	—	—	—	他日	—	—	—	—	—
94	体/	沖/	加	経民		平経	伝認	記責	認		平	平
95			因				責	記他	記慰			平
96								記他	責	平	基他	平
97		—	—	—	—	—	認伝	—	—	—	—	—
98	体惨/						伝		他		基	平
99	体/体		/他			他	伝認		外責	平		平
00							他			世		平

[凡例]

- ・[戦争／終戦] — 「因」：戦争原因論；「加」：加害者であったとする解釈；「惨」：戦争や終戦時の悲惨さを示す一般的な記述；「感」：終戦時の感慨、感激、虚脱感などについての一般的な記述；「沖」：沖縄戦の悲惨さを示す一般的な記述；「慰」：従軍慰安婦について；「体」：個人の体験（著名人、非著名人とも）
 - ・[戦後] — 「民」：民主化の進行について（労働者や女性の権利含む）；「秩」：秩序回復について；「経」：経済的自立、経済成長について；「自」：自由の拡大について；「道」：道徳の変化について；「平」：平和が築かれてきたことについて；「立」：経済的自立がなされてきたことについて；「援」：アメリカの援助が効果的だったことについて；「基」：米軍基地と同居し続けていることについて；「治」：自治が制限されてきたことについて；「軍」：自衛隊軍備の増強について
 - ・[想起論] — 「省」：戦争を反省することを促す記述；「記」：追悼式、記念碑、私的な慰霊活動などについての記述；「世」：世代による戦争への思いの違いについて；「感」：戦争や終戦を思い出したときの感じ方について；「外」：外国からの責任追及について；「日」：8月15日の意味について（ただし冒頭で、「今日8月15日は戦争の悲惨さを悼む日である」などと、儀礼化された形と内容で記されているようなものは除く）；「伝」：戦争体験の伝達について；「靖」：靖国神社への首相や閣僚の参拝について（「記」に含まれるが特に多いので別のものとして示す）；「認」：戦争への認識の違いについて；「教」：教科書問題について；「慰」：従軍慰安婦問題について；「責」：戦争責任論争について；「資」：戦争資料の収集、発掘について
 - ・[現在] — 「世」：世代間の違いについて；「際」：国際情勢について；「平」：平和の危機について；「政」：政治の状況について；「経」：経済の状況について；「基」：米軍基地を抱えていることやその危険性について；
 - ・「他」：以上のもの以外（分析上支障のない限りこう記す）
 - ・「一」は、終戦にちなんだ社説とみなせるものがないこと意味する。
 - ・「戦争／終戦」欄は、「/」の左が戦争への言及、右が終戦への言及
- *なお朝日新聞は、1955年の8月14、15日、1994年の14、17日のそれぞれ両日において終戦の日にちなんだ社説を出しており、いずれの年も両方あわせたものを記した。他はすべて15日に8.15社説を出している。沖縄タイムスの8.15社説は、1956年には8月16日、1957年には17日、1958年には14日、1959年には16日に、それ以外はすべて15日に出されている。

- と、追悼式や教科書問題などよりパブリックな想起についての記述とを分けるとすると、前者は朝日新聞、沖縄タイムス共に減少傾向を持つのに対し、後者は共に増加傾向を持つ。
- ④「想起論」が多様になってきていることも両新聞で共通している。
 - ⑤「現在」については両新聞で共通した傾向は見られない。

これらが妥当だとすると、時間的距離が、トピック変数を排除しつつ、想起の言説形式と相関しているといえることになる。だがもう少し細かな検討をしておく。

表からは、あるトピックがある特定の形式をとる傾向があることも確認できる。だが今みた通りのことが妥当だとすると、また例えば経済成長というトピックが、それ自体は必ずしも戦争と強く結びついている内容を持つものではないにもかかわらず「戦後」としてしばしば言及されていることを考えると、その当時（ある年の8.15社説が出された当時）に話題になっていたことがストレートに社説に影響し、そしてそのトピックがたまたま伴いやすい形式が採用される、ということではないように思われる。少なくともそれだけでは説明が付きにくい。時間的距離と言及されるトピックとがどちらも想起

の言説形式に関わるならば、それらの間の関係は今回のデータだけでははかりがたいが、例えば、ある時間的距離のときにはある想起言説形式がとられやすく、その際その形式と結びつきやすいトピックが社説の言及対象として採用される、というストーリーは可能だ。これは「戦後」形式で言えば、時間的距離が小さいときには現在までのプロセスを述べる傾向を持つが、その形式で述べる内容は「戦後」形式と結びつきやすいトピックとして、新聞によって経済成長だったり基地のことだったりする、ということだ。あるいは新聞社説などをこえた範囲で時間的距離が言説の形式と関連し、そもそもそれによって話題になることを拘束しているということも、説明としてはありうる。

また時期別の形式の両社説の採用傾向をみると、1980年以降に追悼式や教科書問題など「パブリック」な記憶についての言及が、朝日新聞、沖縄の新聞としての沖縄タイムス、日本の新聞としての沖縄タイムスのいずれにおいても盛んに言及されている。このことが欧米での学術研究としての記憶研究——いわば想起論——の隆盛と関連があるのかどうか、思想史的には注目に値する。関連があるとすると、それはたまたまトピック変数が作用したからだけなのか、それとも知のあり方のようなより深層の構造が関わっているのか。今回のデータからは判断できないが、検討の余地はあるだろう。

3-5-3 朝日新聞と沖縄タイムスにおける、時間的距離を示す言葉と想起の言説形式

次に時間的距離を示す言葉と、その言葉が使用されたのと同時期に盛んに採用されている想起の言説形式との関係を見てみる。表2は両新聞の8.15社説で使用されているこの種の言葉を時期ごとに意味づけしつつカテゴライズした

ものである。

朝日新聞の60年代から70年代にかけての時間的距離増大感覚の表現と思われる言葉は沖縄タイムスには見られないが、これを除くと他のカテゴリーは共通し、時期的にも類似している。これは、時期と時間的距離感覚との関係の再考を促すものではある(第2節参照)。

さて、それらの関係については本稿ではおいておき、前項の検討結果を敷衍するようなデータを示しておく。「長いとも短いとも」の「長い」感じは、表を見てわかるように、多くは暦の上で「長い」という感覚を得るとみなすことができる。それにたいして「短い」感じは、「早くも」の場合も含めて、社会の変化など何らかの原因によるのだろうが、少なくとも暦の上での経過年数から来るものではなさそうである。表1と合わせると、感覚としては「短い」ことを表現するような「長いとも短いとも」カテゴリーの言葉や「早くも」カテゴリーの言葉を使用する時期と「戦後」形式の採用時期とがある程度合致している。また同様に「風化」や「遠くなった」などの言葉の使用と「想起論」形式もある程度合致している。つまり朝日新聞と沖縄タイムスという、言及されるトピックの異なる社説において、時間的距離と想起の言説形式が関連することが見て取れることになる。「時期」が時間的距離感覚を表現する言葉と想起の言説形式とをつなぐ単なる媒介物に過ぎないとすると、これは前項に続いてある程度、トピック変数を第3の変数とする擬似相関なしに、時間的距離と想起の言説形式とが関連することの証左になるだろう。

3-5-4 朝日新聞の社説と投書における想起の言説形式

最後に朝日新聞の8.15社説と同紙の8.15

表2 年別の時間的距離の言葉とそのカテゴリー（各冒頭の数字は掲載年）

『朝日新聞』
早くも…
54：早くも9年
55：10年は早かった
長いとも短いとも
60：短かったとも（よくなった面に対応）長かったとも（悪くなった面に対応）
73：長いとは必ずしもいえぬ歳月の間における日本の移り変わり
世代による感じ方の違い
68：戦前世代にとっては、瞬間の短さとしか感じられないだろう
新時代へ；遠くなった；風化；歴史に
63：いろいろな意味で戦後が終わり新しい時代に
69：敗戦の記憶も年毎に遠いものとなってゆく
75：終戦から「ひと世代」たった
84：戦争体験の風化
87：8月15日は遠ざかり、歴史となりつつある。
89 天皇の死、世代交代、経済成長、与野党逆転など、戦後を離れた新しい空気
『沖縄タイムス』
早くも…など
55：歳月は早くもめぐり
61：まだわれわれには悲痛な終戦時の思い出が生々しい。
世代による感じ方の違い
67：8月15日は戦後世代にはそれほど感慨がないかもしれないが、体験者にとってはある種の感慨。
68：8月15日は戦後生まれにとって感慨はないかもしれないが、体験者としては感慨深い。
長いとも短いとも
72：27年は四半世紀を越える長い時間だが、沖縄はまだ基地の中にありわずか27年前とも
74：終戦日は遠い昔のようでもあり当時のことを思い浮かべるとつい昨日のよう
75：終戦日はつい昨日の出来事のようでもあるが、やはり30年は長い。
風化
78：33年を経て戦争の悲惨さも次第に風化
86：戦争の誤りと惨禍を反省し平和を誓うはずのこの記念日も歳月とともに風化。
87：歳月の経過とともに戦争体験が風化したとしばしば言われる。
88：戦後生まれ6割以上。戦争体験の風化が確実に進んでいる。
90：若い人を中心に戦争の記憶が次第に遠のき、戦争体験の風化も指摘されている
91：時の流れるのは早く、戦争体験の風化が心配される。

投書のそれぞれの想起の言説形式を比較した。社説とは異なり、投書はより個人的性格の強い文章であり、それぞれの戦争「経験（伝聞や学習によるものも含む）」がどうなのかによって、投書の内容・形式が大きく変わってくるのは明らかである。そこでコーホート別の想起言説形式をみてみた。投書の分析には社説との関係、

体験談が圧倒的な量を占めることなど、分析に当たって考察すべき事柄が多く再検討の余地があるが、ともかく今回は両者の相関は見出せなかった。つまり時間的距離と想起の言説形式との関係の分析において、意図変数の効果を少しでも排除することができるかどうかはわからなかった。

4 まとめと今後の課題

3-5の分析から、時間的距離変数と想起の言説形式との関連が一定程度ありそうなのがわかった。即ち①それらの関連が、述べられているトピックいかに関わらずある程度確認でき、②特定タイプの時間的距離感覚を表現する言葉の使用時期と想起の言説形式とに一定の関連がある可能性が見出せた、ということである。ただし③想起の言説形式への意図の関わりについてはほとんど何もわからなかった。①と②によって、時間的距離という概念によって、想起のあり方をその言説形式を媒介として説明できる道が開けたのではないだろうか。

社説における想起の言説形式の採用について見出されるとしたその時系列的傾向を改めて示すと、「戦争・終戦」は増加、「戦後」は減少、「想起論」は増加と多様化で、「現在」は傾向をつかみにくいということだった。また形式の採用と時間的距離の言葉の使用との関係については、「早くも」などと「戦後」、「風化」や「遠くなった」などと「想起論」が対応している、ということだった。それらが妥当だとすると、例えば、8.15を記念するつまり戦争を想起する機会において、それが終戦時点から時間的距離が短い場合は、社会の変わりようが著しい——したがって「早くも〇〇年たった」と表現される——という認識から、盛んに「戦後」形式によって語られる。その段階を超えてしまうと、現在と過去（戦争・終戦）があまりにも異なるものとして捉えられるため、終戦から今までのプロセスを語ることに違和が生じてしまう。そこで現在と過去とがあまりに分離してしまったときにしばしば使われる形式が、「戦争・終戦」や多様な「想起論」である。つまり空襲や

戦場で死の恐怖を味わったり餓えに苦しんだりした体験談の引用や、一般論として戦争の悲惨や苦しさや悲しさなどを記すような、過去そのもの記述であったり、靖国神社参拝や教科書問題、また戦争責任論などの、必ずしも新しいとはいえない社会的な想起への言及を多岐にわたって盛んに論ずるようになる。こうして各新聞は結果的に、戦争という重要な過去と現在との関係が分離する、つまり風化・忘却が進行するのに対応する形をとってきたのだ、と。このストーリー自体の妥当性を確かめることは本稿の範囲を超えるが、見出された時間的距離と想起の言説形式との関連から、こうした類の解釈が可能だということである。

最後に今後の課題を示しておく。今回の検討における細かな問題点はさておき、大きな問題として今後、得られた知見を踏まえあるいはそれを展開する上で、取り組むべきと思われることを3つ挙げておく。第1に、何度か述べたように、想起の言説形式にはさまざまな変数に関わりうる。その絡まりの中で時間的距離変数がどのような位置を占めるのかは、トピック変数がある程度排除できること以外は、今回の分析によってはほとんどわかっていない。「ある程度いえる」事柄の多くも、あいまいな認識にとどまっている。こうしたことから、他の国内の新聞や韓国、中国の新聞の「社説」にまで、データを拡大することが必要だろう。またそうしたデータの拡大によって、沖縄タイムスの社説の検討で垣間見られたように、戦争の記憶をめぐる「日本」の新聞と「地方」の諸新聞と「東アジア」の諸新聞との関係の議論にまで視野を広げることができるとも思われる。

第2に、第1の課題を進めるためでもあるが、社説と投書のあり方や両者の関係はどうかについて、もう少し考察することが有益と思わ

れる。共に文章の宛て先は読者であるが一応いえるが、投書の方は社説よりは独白的に、つまり考えや体験の表出自体に意義をみるような感覚とともに作成される面が強いと考えられる。関連して、投書は、その多くが自らの体験を用いている点で明らかに社説とは異なる。社説に個人の体験が載ることもあるが、それは論説委員以外（また新聞社外）の著名・非著名人の引用によってである。また、最終的に特定の個人が書くという点では投書と社説とでは同様だが、社説の場合は複数の論説委員による話し合いに基づいて作成される。また執筆者が自分で書いた文章が誰のオピニオンや解釈や事実選択であるかという意識は、やはり「投書」や「声」と「社説」という一般的・具体的なタイトルによって拘束されるだろう。こうした意味で、社説と投書とを比較した場合、前者は相対的に公的な側面が濃く、後者はより私的な側面が濃いということができよう。このこと自体の確認作業は必要だが、今後はこれを前提において議論を展開することができるかもしれない。今回は主に意図変数の排除のために両者を比較したわけだが、両者の関係性について有効な概念図式が描ければ、時間的距離と想起の言説形式との関連の次元とクロスさせることによって、その関連の議論がより充実するのではないかとと思われる。

第3に、時間的距離変数じたいのさらなる考察も、議論の展開のために必要だろう。冒頭近くで、本稿の議論が記憶の維持や忘却への関心を1つのモチーフとしていると述べたが、今回の検討を通して見えてきたことの1つは、そもそも「忘却」や「風化」の語は時間的距離感覚を表す語でもあって、それらが指し示す概念、つまり過去を忘れるとか話題にならなくなって消えていくとかいうことと時間的距離とがかな

り密着しているようである、ということだ。結局、本稿は一面では、忘却や風化を表す語と想起の言説形式の相関を検討してきたということになるかもしれない。世代の交代、戦争・終戦やそれに関連する言及の積み重ね、個々人の単純な生理的な忘却、戦争・終戦以外の諸々のトピックスの生起といったものと、それら時間的距離感覚を表す語との関係もふくめ、更なる考察を要すると思われる。また例えば、1991年の沖縄タイムスの社説では、時の流れるのは早く戦争体験の風化が心配される、と記されている。3-5-3でみたように、風化を示す記述は2紙の他の社説でも遅い時期にしばしば使用されているが、時の流れの早さを示す語は、他の社説では早い時期に何度か使用されている。つまり同一フレーズの中に、時間的距離が短いものと長いものと——とこれまでは捉えてきた——が共存しているのである（3-5-3でみた、「長いようで短いようで」ということではない）。循環的な時間の捉え方の議論も含め、時間的距離感覚が「過去からの距離として短く感じる～長く感じる」という尺度によって一次的に把握できるかどうかについての検討が必要なのかもしれない。

いずれもそう簡単には果たせないで課題だろうが、今後の研究の展開において常に念頭においておきたいポイントである。

注

- (1) 管見では日本の研究としては今井信雄 [2000] の議論がある。
- (2) 繰り返すが、他の要素がこの形式に関わらないということではない。
- (3) 2002年11月の日本社会学会における、「記憶の地勢学」と題する報告において、報告者の岩井

洋は「この記憶論の地勢学を経て、ゆくゆくは記憶の地勢学（記憶がどのように成り立っているかを総合的に研究することと思われる：藤森注）にまでもっていきたい」と述べていた。また2003年4月には、社会学や関連分野における記憶研究の一线の研究者達による特別セッション「記憶のアナトミー／解剖学」が開催されている（司会：水川喜文；報告者：浦野茂、松島恵介；指定討論者：浜日出夫）。

(4) 先に述べたトピックと時間的距離との関係と同様、意図と時間的距離は概念的に重複する部分もあるだろうが、本稿では便宜上独立した変数とみなす。

(5) もちろん従来の記憶研究の流れからすると、今後は [i] についてのより細かな検討が必要になるだろう。

(6) もちろんこうして表示した内容は、かなり細部を無視したものである。傾向について述べる目的を持つ本節にとって、内容の示し方の細かさとしてはこれが限界であり、むしろ分析目的にとってはこのくらいが妥当なところだと思われる。必要があればさらに細かな部分も見ていくという分析姿勢を保持する必要がある。

(7) ただし今回はこの区別による有意義な知見はあまり見出せなかった。

文献

朝日新聞 1946-2000, 朝日新聞社。

Confino, Alon 1997 "Collective Memory and Cultural History : Problems of Method", *American Historical Review* 102-5:1386-1403.

藤森 啓 2003 「集合的記憶研究の成立——記憶の表象の生成あるいは発見——」, 庄司興吉（編）『21世紀社会の課題と展望——II 地球社会化の中の社会理論と社会運動——』, 粹出版社。

今井 信雄 2002 「震災の記憶と被災跡——その「永遠」と「うつろいやすさ」について——」, 『現代社会理論研究』12:69-78。

石田 雄 2000 『記憶と忘却の政治学』, 明石書店。

岩井 洋 2002 「記憶論の地勢学」, 第75回日本社会学会報告。

沖縄タイムス 1951-2000, 沖縄タイムス社。

Roussio, Henry 1991 *The Vichy Syndrome : History and Memory in France since 1944*, Arthur Goldhammer(trans.), Harvard University Press.

Schuman, Howard, Army D. Corning 2000 "Collective Knowledge of Public Events : The Soviet Era from the Great Purge to Glasnost", *American Journal of Sociology* 105-4:913-956.

(ふじもり ひろし、東京大学大学院、YRI02256@nifty.ne.jp)

The Discourse Forms of Recollection and the Time Interval

The Time Series and the Comparative Analysis of 8.15-Editorials and 8.15-Letters

FUJIMORI, Hiroshi

University of Tokyo

YRI02256@nifty.ne.jp

This paper tries to comprehend the correlation between time interval and recollection in order to think the social recollection of past events such as the historical narration or the commemoration. So with the attention to the relationships which the present makes with the past in the phrases uttered as such recollection — the relationships are called 'the discourse forms of recollection' in the paper — , how the use of each forms is in conjunction with the time interval is examined. The appeal points in the paper are the analysis of data and the methodological exploration as needed.

増山幹高著

議会制度と日本政治

— 議事運営の計量政治学

A5判 300頁 四〇〇〇円

既存研究のように、理念的な議会観に基づく国会無能論やマイク・モチツキに端を発する行動論的アプローチの限界を突破し、日本の民主主義の根幹が議院内閣制という制度に構造化されていることを再認識し、この議会制度という観点から戦後日本の政治・立法過程を体系的・計量的に展開する画期的試み。

西平重喜著

選挙法の変遷と実状

— 選挙の国際比較

A5判 600頁 一〇〇〇〇円

本書における選挙法は国民を直接代表する議員を選出する方法のことである。第I部では世界各国の選挙方法を横断的に捉え、各種の選挙法の定義・意味・問題を整理し、第II部では国別選挙法の変遷と実状、採用の理由・特徴・効果等をデータの分析から論理的に推理する方法で読み解く。三十年に及ぶ研究成果。

東大法・蒲島郁夫第4期ゼミ編

A5判 520頁 一〇〇〇〇円

選挙ホスターの研究

〇〇年総選挙に立候補した候補者二二〇〇人弱のホスターから六八五枚を収集・データベース化し、多様な変数を抽出して、比較検討し興味深い命題を提示した本邦初の試み。研究者・候補者必見。

蒲島第1期ゼミ編「新党」全記録(全3巻) 各八〇〇〇円

蒲島第2期ゼミ編現代日本の政治家像(全2巻)各八〇〇〇円

蒲島第3期ゼミ編有権者の肖像 A5判 700頁 二二〇〇〇円

ぼく たく しゃ
木 鐸 社

東京都文京区小石川5-11-15-302

電話 (03) 3814-4195 ファックス (03) 3814-4196

http://www.bokutakusha.com